

「愛」という名の量子論的ネットナビ

——宇宙の存在の意味を巡って——

佐藤 明雄

(1)

最近の日米の自動車業界では、西海岸の町から東部のニューヨークまで、一切の人の手を用いずに到達する、完全な自動操縦の研究が進んでいると、新聞が報じた。道路の選択、アクセルとブレーキから信号の識別などすべてを人間に代わって機器が遂行するという、いわばカーナビの究極の機能と言える。高空での航空機でもすでに自動操縦は常識であるが、障害物のない飛行は、地上の走行に比べてさらに平易で、技術が進めば空港での離着陸を含めて目的地まで、一切の人力に頼らない航空方式の時代も遠くではないであろう。

このような究極のカーナビに驚く我々であるが、実は我々自身は日常、さらに精巧なカーナビ機能を利用しているのではなからうか。すなわち、人は日々の日常生活における小さな目的から、受験や結婚や就職や人生設計のような大きな計画まで、目標を立てて行動する。その達成までには紆余曲折、予測不能な障害もあるが、恰も自動車の発進前に目的地を入力するごとく、本人の頭の中には目的達成のイメージが描かれているはずである。一端設定された目的は、たとえ本人自身が忘れてしまったことも、円滑に達成されるように導く。これを一種の「カーナビ作用」と言って差し支えないであろう。

実際のカーナビでは、宇宙衛星のGPS機能が利用されているが、我々が日常に抱く目的や願望や夢や祈りなどの場合、そこに働くものがGPS機能ではないことは確かである。しかし、未来の不確定要素だらけの中で、人は希望の達成の姿をイメージに描き、願望し、夢を語り、そして神に祈る。悪事を働く人間もその仕事の成功を願い、無神論者の医師も、自分の手術の成功を祈る。いうなればそれは、万人に共通の「心のカーナビ」である。

洋の東西、そして時代を問わず祈りや願望は人類普遍のものであるが、人類はなぜこの様に、科学的実証

の裏付けもない願望や祈りを頼りにし、またなぜ実際にそれらが叶えられるのか。自然治癒や古来の加持祈祷や遠隔治療、偽薬や偽の手術が効果を発揮するプラシーボ現象や、その逆のノーシーボ現象などはなぜ起こるのか。

(コッホのコレラ菌説に反対するベッテンコフファーは、弟子と二人でコレラ菌入りの水を飲む自飲実験をしたが感染することはなかった。これはコレラ菌の発症力よりも彼らの「想念」の力が勝ったことの証しで、医学の常識を破るものであろう)

その他、医療の現場やスポーツ界でも採りいれられている「イメージ療法」や「意念」に重点をおく氣功法の効果、灼熱の石炭上の素足渡り等々、多くの超合理的実例をわれわれは知るが、それらには何らかの形で「思念」や「想念」が関わり、そこでは科学的常識を破って「因果律の遮断」という現象が生じているが、いまだ科学的解明には至っていない。

目的の成就をより確実なものにするためには、今日ならばコンピューターがあり、必要データを入力して確率計算の示す最善の方法を選択する科学的方法がある。また有能な医師や弁護士や会計士やコンサルタントの助言に頼るなどの合理的手段もあるが、それでも人々が常に願望や祈りに頼ることを止めないのは、意識下でその効能を「知っている」からではないだろうか。

(2)

デカルト的物心二元論や唯物的なニュートン物理学の立場に立つかぎり、人間の「思念」や「想念」が物理的事象に干渉することはあり得ない。祈りも願望も夢も、すべては観念の柵の中に閉じ込められた幻想に過ぎぬ。しかし量子物理学によれば、従来固体とみなされていたあらゆる物質は、本質的には素粒子として、粒子であると同時に、波動の性格をもつ。心はエネルギーとして、その波動の様々な変容であり、質量の元

なる素粒子そのものが、物質とところの両性を持つとするならば、物象と心理作用の相互干渉も否定するものではない。ここにニュートン物理学から量子物理学への、根本的な思想転換がある。

それでは、ある目的の達成や祈りの実現を願う心の作用は、どのようにその「カーナビ効果」を発揮するのであろうか。願望や祈りなどの「思念」や「想念」が、その実現に向けて作用するメカニズムとはどのようなものであり、それはGPS機能に代わるどのような機能があるのであろうか。

それを可能にするシステムを、筆者は「宇宙においては、あらゆるものが非局在的に結びついている」という、量子物理学独自の思想をもとに、仮にこれを、「宇宙全体に広がる量子論的ネットナビ」もしくは「宇宙を結合させている全体場」と呼ぶことにする。

全体場は、量子のあらゆる状態が重なり合った潜勢態、すなわち「情報」として内蔵された影舞台であり、それは、デビッド・ボームが「暗在系秩序」と呼んだものである。

さて、最初に設定された「カーナビ」が自動車を忠実に最終目的地まで誘導するように、人の願望や祈りを、時間と空間の制約なしに、その設定目的の実現に向けて導くもの。あらゆる複雑な環境と条件を、そして当事者とそれに関わる関係者の潜在心理から無意識の行動までを、極微のレベルで微調整してくれるもの。老子の「天網恢恢 疎にして漏らさず」の「天網」も、wwwのネットナビもその一端であろうか。それは、従来の科学では説明のできなかつた、テレパシーや透視や予知の現象も、思念や想念の現実化も、また本稿の主題である「意味のある偶然事象（シンクロニシティ）」の発生メカニズムの解明をも可能にするものであろう。

それでは、そのネットナビを駆動させ、無限に近い情報量を内蔵する「全体場」から必要な情報だけを受け、必要な人と物にだけそれを与えるものは何であるか。情報の授受と伝播がランダムに起こることはない。それは「共役」と呼ばれる関係にあるもの同士、すなわち、共鳴、共振、同調など周波数特性が同じか、似た形状のもの同士の間にのみ限られる。広いホールの中におかれた音叉や弦楽器の弦は、同じ周波数に調音されておれば、遠近に関係なく遠くホールの端に置かれていても共鳴するが、それ以外ではごく近くに置かれていても共鳴を起ささない。中国の諺に「縁のある人とは千里離れていても会うが、縁のない人は隣人で

あっても会わない」という、俗に「縁」というものである。

その様に、量子論ネットナビないし全体場なるものは、ところの原型である波動や波長の語が示すように、物理的要素よりも、むしろ心的要素の性格を持つものであり、そこに祈りや願望やシンクロニシティの解明に、少なからぬ根拠を与えるものと期待ができる。

さて、「念ずれば花開く」、「万事如意」、「三界は唯心之現象」などの表現も、物象に対する思念の作用効果を語る言葉であるが、それらは何ら、少なくともニュートン物理学に基づく範囲での科学的な根拠を持つものではない。思念や想念が、その個人自身の生体内の免疫力や自然治癒力の向上に影響をもつことは、今日では医学的にも十分に理解を得られる範囲であるが、テレパシーや遠隔治療や、「子の刻参り」の呪詛殺人ともなれば、医療現場や、司法裁判所では考慮の埒外のことである。

(なお、この「量子論的ネットナビ」仮定の動機は、後述するように、筆者の数多い「シンクロニシティ」体験の解明を契機とするものであるが、シンクロニシティ自体が極めて個人的主観的で、再現性や反覆可能な科学的検証の対象になりえないことは、予め読者の了解を得ておかなければならない)

(3)

生化学的薬理の機序によって投薬効果が左右される治療においても、医師と患者の信頼関係や、とりわけ患者自身の治癒への意欲が大きく影響することは広く知られている。

がん治療における「イメージ療法」に一定の効果がある一方で、その逆に、主治医の不用意な余命宣告が、患者の寿命を左右する不幸な例も少なくない。

ある医師は、食道ガンの進行状況から確信を持って「余命4か月」を宣告したが、その宣告の通りに4か月で亡くなった患者を解剖してみても驚いたという。食道のガンは消滅しており、肝臓と肺にある小さな腫瘍も死に至る程でもないものであったからだ。

この場合、患者の死因はガンではなく、生への希望を失わせた医師の言葉であり、それによって患者の心のカーナビは「死に向かうルート」に設定されていたのであった。このような「誤ったカーナビ設定」が、今日も多くの病院で「インフォームド・コンセント」の名のもとに行われているとしたら由々しき問題と言

える。医師の立場から、冷徹な告知を義務と考える主治医もあるであろうが、上に紹介した事案のごとく、医学的データを超越する「更なる真理」が存在することの留意は必要である。

東京のさる有名な大病院では、末期のがん患者に対する余命宣告には、家族とともに患者本人の同席が義務づけられていた。その非情さに耐えられなかった知人家族は患者を転院させた。その後、院長自身の妻がその当事者となることを契機にして、理事長が代わり、病院の治療方針が変わったという事例もある。

最近の病院では、検査、手術の度ごとに「同意書に署名」が要求される。これは患者からの訴訟を怖れての病院側の防衛手段であろうが、それでさえ弱者の立場におかれている患者には少なからぬストレスになっているはずである。

筆者は2006年10月に『量子論的医学への試み』と題した小論を発表し、西洋医学が依然として唯物的ニュートン物理学の枠を出ない「部門別医学」であり、身体を精密な生化学的マシンとみなす治療方法に終始していること、また、量子物理学の知見からする心理的要素への欠如や、遺伝子レベルの対応の遅れも指摘した。

量子的世界は、常に「可能性の重なり合った」未定の状態にある。その可能性を現実化するのが観測・測定行為であり、これが「観測者効果」observer effect と呼ばれるものである。(シュレインガーの有名な「生きている猫と死んでいる猫の共存」を参照)これに従えば、人は健康と病変の50%：50%の未定の状態にあり、これをどちらか一方に現実化させるのが「診断という観測行為」というものである。放置して、悪化の経過をたどり死に至る場合もある一方で、自然治癒に向かう例もあり、深刻な発症もなく終わる例もある。

これを思うと、最近出版界を賑わせている、ガンに対する「治療をしない治療」、[ガン放置療法]など複数の専門医師たちの主張は、潜在ガンを取って未定の状態において、更なる病変確定にもたらずことを避けようとするもので、量子論的には一定の根拠のあることと言えよう。

ある老人施設内で自然死を遂げた多くの老人の病理解剖の統計結果で、40%以上に潜在ガンが発見されたというが、彼らはガンで死んだのではない。ガンは存在していたが、死をもたらす程には成長もせず、ガンと平和共存していたことになる。高齢者ほどガンの進行も遅いこともあるが、ガンも自分がガンと名指しさ

れない限り、ガンとして働き辛いかもしれない。

近年、「新しい生物学」(エピジェネティクス)を提唱する米国のブルース・リプトン教授が「量子物理学が生物学・医学を変える日は近い」と述べ、今まで、生物学や遺伝子細胞学が量子物理学の知識を考慮に入れなかったことの過ちを説いていることは興味深い。

彼がここで問題とするのは、当時近代生物学のドグマとなっていた、遺伝子が生物のあり方をコントロールするという「遺伝子決定論」についてである。それはDNAには個人の一生の情報が記録されており、人は病気の種類から発病時期まで、親から受け継いだ遺伝子によって完全にコントロールされているという、「DNA優位性」の考えである。それは恰も、人間が親から受けたDNAに支配された奴隷であるかのごとき、運命決定論的な考えであった。

しかし、ブルース・リプトンの提唱するエピジェネティクスは、この「遺伝子の優位性」に対して「環境の優位性」をとる。すなわち遺伝子には自らのスイッチのオン・オフを決める「自己創発」という力はなく、環境との情報交換をもとに、我々が発する「信念」や「思念」こそが、遺伝子のオン・オフを決める主役だということである。

生命が遺伝子やガン細胞によって自動機械的に支配されているのではなく、患者自身の信念や思いのオン・オフこそが、その主人公であるというならば、ガン細胞のアポトーシス(自滅作用)や免疫細胞の活性化に関しても、事情は同じであろう。

上に述べたコレラ菌の自飲実験で示した、ペッテンコフラーのコレラ菌発症未遂の理由を、エピジェネティクスが裏づけた感があり、この細胞遺伝子学の考えは、病気治療における生への意志や想念や祈りなど、「心」の果たす役割を我々に考えさせるものである。

(4)

さて、話を再び「量子論的ネットナビ」に戻してみよう。このナビの利用者はひとり人間に限らない。動植物から細菌に至るまで、彼らの生態の説明には、仮説にしる「量子論ネットナビ」に勝る合理的説明はないと思われる。

渡り鳥に何千キロの距離を、一枚の地図も気象図もなく、途中の低気圧や雷雲や乱気流の危険を回避しつつ、無事に目的地に到達させ、遠洋回遊の魚群を間違なく故郷の川に導き、その冬の雪の深さに応じた巣

の高さを鳥に教え、また火災のある家宅や沈没の危険のある船舶から事前にネズミたちを逃避させるのも、人間に「虫の知らせ」が働くのも、この量子ネットのお蔭ではないだろうか。

初めて連れていかれた秋田市内で迷い、置き去りになった飼い犬が、3年後ボロボロ姿で名古屋の飼い主の元に帰ってきたという。人間が地図や言葉や通信手段に頼るところを、彼らはその「思い」だけで宇宙の秩序に組み込まれている「量子ネット」を起動させ、「カーナビ効果」を導くのではないだろうか。

量子物理学の「非局在性」は、量子宇宙が究極的には時間も空間もない、エネルギーと波動の複合体であると説くが、次の諸例が示すように、その作用は何と優しく愛に満ちていることか。

飼い犬が主人の帰宅を予知して窓辺で待機することはよく見られるが、1年に一度フランスからチンパンジーの生態研究にアフリカを訪れる女性研究者の到着を、当のチンパンジーは二、三日前から港に来て待っているというが、その到着を彼に伝えるのは何なのか。

また観葉植物が、普段世話を見てくれる主人の外出中の一日の喜怒哀楽の心理の起伏に同調して反応するのを、取り付けられたポリグラフ（うそ発見器）が見事に記録しているという。また、葉を焼くという行為にポリグラフが反応するのは理解できるが、それは実際にマッチを葉に近づけた時に限らず、そのことを「心に思い浮かべただけ」で反応が起こるということはどういうことであろう。しかも、実験者が本気で葉を焼く意志のないことを見抜いた葉は、二度と同じ行為に対して反応を示すことはない。人間の言動の真意か擬態かさえ見抜く能力を彼らは持っているようである。

この「人の心が読める」かのような植物の反応は、量子物理学における、量子の「非局在性」に関する実験を思い起こさせるものがある。2個の素粒子AとBについて、観測者がその測定結果を「心に刻んで」実験設備を整えた瞬間に、粒子Aは時間的・空間的一切の制約を超えて、粒子Bに、粒子Aと相補的な状態をとらせるという。まして実験の実行の有無にかかわらず、観測者が測定結果を心に刻んだだけで起こるとなれば、上の「心に思い浮かべただけ」に符号するものがある。植物の葉もその組成が素粒子であることを思えば、不思議でないのかもしれない。量子世界の本質はかくも心理的、こころの機微にも触れるかの如くであり、コペンハーゲン学派の量子論解釈が、特に「唯心論的」、「観念論的」と呼ばれるゆえんである。

また、同情心や利他の情は動物や植物の間にもみら

れるようである。好物のバナナを取るその行為が、その都度隣の檻のチンパンジーに、ある苦痛を与える仕組みになっていることを知ったチンパンジーは、欲を抑えてバナナを取ることを止めるという。また、実験者が偶々ポットに余った熱湯を排水溝に流した瞬間に、隣室の観葉植物に取り付けられたポリグラフが異常な反応を示したのも、熱湯をかけられて死ぬ排水溝の中の細菌が発した危機信号への、植物の同情からであろうか。そしてこのような情報の瞬時伝達を可能にするものも、量子論的ネットを措いてはないのではないだろうか。

これらの実験は、生命体も量子的システムの中で一貫性を持っていることを示そうとする、真摯な生物学者たちの実験例の一端を紹介したものであるが、それでもデカルト・ニュートン物理学レベルを固持して、狭隘な「反覆再現性」をしか実験の基準と認めない大方の科学者からみれば、多分に「トンデモ科学」か「似非科学」に属する寓話とみなされるに過ぎないであろう。

(5)

そのことは措くとして筆者の憂うのは、「ロゴス文明」の一環である物質科学の進歩による、近代の唯物論的世界観が広く世界に蔓延して、人々の心をニヒリズムの^{つぼ}増埒へと巻き込んで已まない現状である。人間は自らに最も近い「心」についてさえ、未だその出自を明らかにできないばかりか、我々が魂と呼び、愛と呼び、希望と呼ぶものも、すべては死とともに消滅する脳内意識の所産でしかないと考え、宇宙の中から神も心もその居場所を排除する結果となっている。

哲学者バートランド・ラッセルは「宇宙の誕生も生命の進化の中での人類の出現も、希望も愛も信念も、すべては冷たい原子の偶然の配列の結果であり、そこには意味や目的の微塵も存在しない、すべては太陽系の終焉とともに消滅する運命にある」と主張し、また著名な宇宙物理学者のスティーブン・ワインバーグも「科学的手法では、宇宙や人間の存在に意味を発見できることはない。もし宇宙の究極の法則が発見されたとしたら、それは慄然とするような冷酷で非人間的なものであろう」と語っている。また、英国の遺伝学者リチャード・ドーキンスは、近年話題を呼んだ『神は妄想である』の著書によって、過激な無神論を闡明することで、欧米のキリスト教社会に少なからぬ衝撃を与えた。しかし、果たして科学的手法で捉えられない

故をもって、神の存在や宇宙存在の意味の否定が出来るものであろうか。しかし、西欧の知識人の言う「神」の観念は、ニーチェの「神は死んだ」の場合と同様に、伝統的なキリスト教教義における擬人的な神観念であり、その立場からするならば、筆者も「擬人的な神」が妄想であるとする主張に対しては、敢えてこれを否定するものではない。宇宙創造の神が、燔祭の羊の大なることを喜ばれ、進化を否定して、今も天動説を支持されるなど、到底信じ得ない筆者ではある。

それよりも筆者の関心は、宇宙の意味や神の存在の有無に関する大問題について、単なる科学的な手法だけの結果を根拠になされる、悲観的で絶望的な意見の表明についてである。それが、特にノーベル賞受賞クラスの影響力のある科学者たちによるならば、その社会に与える負の影響を考えると、余程に慎重であらねばならない。このような思想が徐々に蔓延し、素朴な人々から希望や愛や神への信仰や自然への畏敬の念を奪い、それによって道徳的規範や法的秩序への軽視、さらに確信犯的挑戦へと進行することで社会秩序の崩壊が進む、そのことへの懸念である。

現代世界における、大は民族国家間の戦争・紛争からテロ、小は家庭内殺人や通り魔、自殺者の増加まで、我々が日常に目にする報道は、この様な悲観的思想の蔓延が無縁とは言えない。その意味では、人生に絶望し自ら死刑を望んで無差別殺人に走る青年も、理由なき殺人犯も、ニヒリズムという時代思想の哀れな犠牲者と言えるのである。

もし、「宇宙を支配しているのは、意味も価値もない、冷たい原子の偶然の動きに過ぎない」という言葉に触発された青年が、この高名な物理学者の愛する身内の殺人に関わったとしても、彼はこれを「冷たい原子の偶然の単なる配列の結果」と諦めるであろうか。そしてそれが真実であるとするならば、我々もまた、いかに残酷な殺人行為であれ悪行であれ、これを非難する科学的根拠を持たないし、一方、愛の実践を讃え、積善に努力することの価値も理由もなくなる。それらすべては、善悪や価値基準に無関係なる原子の偶然な動きの結果に過ぎないからである。このような思考経路の中では、「人はなぜ人を殺してはいけないか」や、「なぜ自殺してはいけないか」の問いに答え得る、科学的根拠のある理論は絶対がない。

翻って言うならば、そもそも宇宙物理学を専門とする科学者たちに、宇宙存在の意味や人生の目的を問うこと自体が、「木によって魚を求める」過ちに等しい

ことである。かってマックス・ウエーバーは、17世紀のオランダの博物学者・スワンメルダムが言った「私はここに一匹の鼠を解剖して諸君に神の摂理をお見せしよう」の言葉を引用して、現代の学問科学はすでに「神と最も縁遠いもの」として、世界の意味や神意を示すものではないと、断言している。マックス・ウエーバーがそこで言わんとすることは、世界の意味や神の存在、人生の意味目的などの問題は、学問や学術などの知識とは全く無関係のことであることの再確認であったはずである。

それを思えば、バートランド・ラッセルやステイブン・ワインバーグが、宇宙や人間存在の意味や目的について、これを宇宙物理学や量子物理学の知見の結果から、断定的な見解を示すことは、逆の意味での17世紀的な、時代はずれの発言であると言えよう。

宇宙物理学や量子物理学が最新の探査機や実験器具の恩恵により、多くの新しい発見や知見を生み出したことと、科学者がその「知見の意味」をいかに理解するかは、全く別のことである。論語読みの論語知らずは、何時の世にも大きな教訓なのである。

ガリレイやニュートンは、慣性や万有引力の法則の偉大な発見者であった。しかし、彼らは、それをもって、神の存在や、宇宙の意味の有無を語るほどに傲慢ではなかった。むしろ彼らの業績が「近代の自然科学の中でいかなる意味を持つか」について明らかになるためには、哲学者カントの登場を待たねばならなかったのであり、そこにカントの不滅なる偉大さがある。

(6)

さて改めて、宇宙の存在や人生の意味や目的、神の存在の有無を問うならば、その問いには、「答えはない」というのが正しいであろう。しかしそれは、カントが言ったように、超越的な意味や目的の有無を論ずることが「人間理性の越権行為」に属することの理由だからではない。

このような超経験問題に関してカントは確かに、理性の越権を戒めて、「信仰に座をあけるために、知識を断念する」と言った。これは、知識の限界を知った彼の叡智ではあるとしても、21世紀の現代においては、そのまま通用する言葉ではない。

すなわち、1) 我々は、どの宗教の、どの信仰のために「その座をあける」のか、と問われても、キリスト教を共通公認の信仰にしたカントの時代とは、異なった時代と社会に生きているのである。2) 「知識を断念

する」という場合も、カントはどのような知識を言ったのか。カントは、理性が超経験的問題にかかわった場合、二律背反や誤った推論など、必ずそこに理性自身が犯すことが不可避な、論理矛盾や自己撞着があることの原因からの知識断念であった。カントはそこに、理論理性の限界を見究めて、実践理性すなわち道徳と宗教の問題に解決の道移したのである。

しかし時代は進んで21世紀の現代。我々はカントのいう「その座」をあけるべき信仰も宗教も有せず、また理性は「越権」を気遣う制約もなく、自由にその理論の当否を実験実証の判断に委ねることができる時代に生きている。新しき酒は新しき袋にこそである。

さて、宇宙科学や物理学が進歩して、宇宙が137億年前のビッグバンによって創成され、40億年前に地球上に生命が誕生し、進化の結果に人類が生まれたと知ったとしても、それで宇宙や人類誕生の目的や意味を「直接知る」何らの手掛かりも有するものではない。

まして現在、「137億年前のビッグバンによる宇宙の創成」と予想されてはいるが、そのバンさえが宇宙での「初めてのバン」であった確証はない。バンが宇宙に残した余韻とも残滓ともいえる「宇宙マイクロ波背景放射」の探査結果は、宇宙に存在する光子の大部分は、137億年前をはるかに超えた8000億年前！に生成されたことを示していると言われる。これは何を意味するのか。

宇宙の中で1000億個を数えると言われる地球型の惑星の中で、UFOを飛ばせるほどの高度の文明と叡智を有する惑星人であれば話は別として、不完全な言語と論理と数式程度の知識をもって、宇宙の意味や目的の有無について断定的な結論を出すことは、傲慢不遜と言えよう。まして現在我々の知るのは宇宙の5%に過ぎず、残りの95%は未知の暗黒物質と暗黒エネルギーという状態であれば、我々の知識は、巨象の背中に跳ぶ蚤のそれにも劣るであろう。

アーサー・エディントンは、量子物理学者の立場から「何のものも実在しない。自分の妻でさえ実体は複雑な微分方程式でしかない」と記している。物理学者としての誠実な告白と言えよう。しかし、「微分方程式である愛妻の作った、微分方程式である料理を食べる食卓の味」を考えると、私はわが家の夕食の幸福を顧みて、科学の説く真実のかくも悲しく味気ないことかと、同情を禁じ得ない思いである。すべてのものを微分方程式で観る眼は研究室に置いて、愛妻や家族との楽しい時間を、愛情と感謝と喜びで過ごす「人間・エディントン」として我が家に帰ることを望むも

のである。人はパンによってのみに生きるのではない様に、物理学によってのみ人間であるのではない。人は微分方程式の影絵でもなければ、まして奴隷たる必要はないのである。物理学者であることは、人間であることの一部分に過ぎず、微分方程式によって諸物、諸事象を解明し記述することも、自然理解の一つの方法に過ぎないからである。

虹の美しさに感動する人に、分光器にかけた光の波長を見せて喜ぶ人は、美しい音楽の流れるラジオやCDを解体分解して、音楽の源を探そうとする人のごとくである。

人間には、言葉を用い論理をめぐらし、数式を駆使して微分方程式を立てて実在を認識しようとする「ロゴスの知性」が与えられている。人はこれを長く人間だけの特権とし、矜持とし、その上に学問科学の華麗なる文明を築いてきた。

しかし一方、豊かな感性や喜怒哀楽の感情、驚きや、想像力、直観、感謝や畏怖や懐疑の念、良心や愛や惻隱の情など……さらに豊かな心的能力が賦与されていることも事実である。それらはまた宗教、芸術、美術、音楽、詩歌、文学、演劇などの世界を展開し、豊かな人間文化を創る源になったことも周知のとおりである。にも拘らず人間の持つ心的能力の中の一つに過ぎない「ロゴスの知性」を、宇宙ないし人間理解の唯一にして最も確実なる手段として、他の感性的能力を切り捨てた点に、人間文明の大きな間違いがあった。

(7)

しかし、ロゴス偏重の傾向は伸長し、ロゴスを世界理解のための最善、最強の優れたツールと自負した西欧中世の神学者、哲学者たちは、論理的思弁によって神の存在証明ができるものと、存在論的、目的論的、本体論的など、様々な神の存在証明を試みもした。近代になり、論理に代わって実証科学が生まれると、その知識は急速に拡大することで、科学者は、宇宙の成り立ちはおろか、人間や宇宙の存在の意味や目的、さらに神の存在の有無に至るまでを、科学的実証によって解明しつくせるかの思いにまで至ったのである。

しかし、ここに大きな誤りがある。我々は物体の落下を見て「重力の働き」を知るのであるが、その基なる「重力場」そのものを観測はできない。心のつくりだす言葉や行為を知ることはあっても「心そのもの」を見ることはできない。神についても事情は同じである。無から有を創りだした「働きの結果」を見て、神

の存在／非存在を考え得るだけで、何ら存在の有無の断定を得られるものではない。

そして神の存在の否定的断定が、虚無的で絶望的な世界観と、倫理社会秩序の崩壊であるとしたら、ロゴス文明が人間に残した収支決算は、なんと惨めなものであろう。

所詮、我々はロゴスなる知恵の木の実を食べてエデンの楽園を追放された身分である。その人類は分離、分析、分類、分断、分裂、をこととするロゴス機能で文明の防壁を張り巡らし、同じ人間同士が国家、民族、部族、種族、宗教、宗派、さらにイデオロギーで対立し、ついには核戦争による人類自滅の危機に怯える世界となった。

これが万物の霊長を自負するものの実態である。さらには、その分離機能を拡大させて、人類自らを宇宙自然の全体から、隔離・分断させて、宇宙の孤児となってしまうが、楽園追放の意味は時間を超えて、かくも深甚かつ執拗なものであるか。

しかも最大の不幸は、かかる実態であるロゴスに対する人間の、今も抜き難い盲信と執着にある。多くの局面において人類のロゴス文明はすでに持続不可能で、制御不能に近い状況に立ち至っていることは誰の眼にも明らかどころである。しかし、多くの恩恵を蒙ったロゴスの故であろうか、その原因をロゴスに帰する具眼者はいない。難問の解決に、自らがそこから下りさえすれば容易に持ち上がる座布団を、座ったまま両手で持ち上げようとする、その図柄は滑稽であり喜劇である。

国家であれ、企業であれ、その繁栄と隆盛をもたらしたものが、没落の原因であることを歴史は数多く教えており、文明の消長も盛衰の理ことわりに変わりはないとすれば、人類はロゴスによって栄え、ロゴスによって滅ぶ、と言っても過言ではないであろう。

しかし、このようなロゴスの陥穽は、すでに古代ギリシャにもあったことである。かのゼノン¹は、師のパルメニデスの運動否定論に従って、「飛ぶ矢は静止している」や「アキレスは亀に追いつけない」などの詭弁論理をもって、運動の一切をすべて感覚の迷妄なりと否定した人物である。「これを聞いた一老哲はゆっくりと立ち上がり、黙って一歩踏み出した」と哲学史家は伝えているが、論理の力とは所詮このように、一老人の無言の一歩にも及ぶものではない。

無神論者が最も困る場面があるという。誘拐された愛児の無事、絶望的病状からの奇跡的回復、九死に一生の無事生還など、人生には無条件に「感謝をしたい」

瞬間が訪れるものである。具体的に誰に対しての感謝かを知らなくとも、その幸運を与えた「神という名の未知なる主^{あるじ}」に感謝をしたい、それが人間の偽らぬ自然感情であるが、その時無神論者はどうしたらよいか。それは理屈や信条を超えた、見知らぬ神との出会いの一瞬である。

「神は細部に宿る」というが、「科学的手法」を振りかざして神を探して広い宇宙の端まで行く必要はない。宇宙のどこかに神の玉座があるわけでもない。一瞬の感謝の、かくも小さき細部において、人は神に出会うのである。

(8)

パートランド・ラッセルやステイブン・ワインバーグが主張するように、宇宙探査機のもたらす情報からも、宇宙の意味や目的を直接示唆する何ものもないのは事実である。また、その証左の一片も見つからなかったと言って、絶望する必要はさらさらない。

宇宙は我々の想像を絶して神秘に満ち、奇跡に溢れ、この先まだどのような秘密を明かしてくれるのか、宇宙論や量子論世界など筆者の私にとっては、読者の興味をそそってやまない推理小説の次号を楽しみにさせる程の魅力的な世界なのである。

宇宙と素粒子たちの演ずる舞台の幕は、いま上がったばかりである。一部科学者のように宇宙や素粒子から得た断片の知識とデータをもとに、性急に断定的な結論を口にするには控えてはどうであろう。たまには小賢しい論理思考を止め、計算を止めて、無心で広大な星空を眺めてみよう。庭に咲くバラにそっと宇宙の秘密を問うてみよう。黙ってはいるが、宇宙の意味を我々よりもっと深く知っているかもしれない。そのバラに、ドイツの神秘主義詩人アンゲラス・ジレジュウスに倣って詩の一篇を捧げよう。

バラの花の咲く なぜの理由もなく
 バラの花の咲く 何の意味もなく
 バラの花の咲く 誰に見られることのなく
 ただバラの花の咲く 歓びを花一杯に秘めて

このようなバラの花を見て「慄然とし」、「絶望する」必要は毛頭ない。バラの花びらを雀り色素分離器にかけ、香りの成分を分析して満足することのなんと無粋なことであろう。

それよりも、花卉を鎖に編んで乙女たちの髪飾りと

される花びらの、恋人の心を占う花びらのなんと優しく幸せなことか。宇宙もバラの花も同じく、理由も意味もなく存在し、そして美しいのである。

(9)

さて、宇宙の創成から生命の誕生と進化の過程における、宇宙や人間が「現にかくあることの確率」は、これを「単なる原子の偶然の配列の結果」として考えるには、確率論を超えた余りにも極微な、多くの微調整が秘められていることがわかる。

例えば、現在の宇宙があり得た確率は、「10の123乗を10の冪とした数の中から一個を選ぶ」計算になり、これをランダムに選ぶとすれば、それに必要な時間は「10の80乗を10の冪とした年数」という、これも又、ビッグバン以来137億年という宇宙の時間をはるかに超えたものとなる。また、初期宇宙の膨張速度が10億分1秒速いか、遅かったかで、宇宙は希薄な低温の気体のままで終わったか、誕生の瞬間に再崩壊していたかであった。その他、電磁場の重力に対する相対的強度が、太陽のような安定した恒星の存在や、その惑星上での生命の進化を可能とするような定数であること、中性子と陽子の質量の差が、電子の質量の2倍の、実質的な化学反応の生じうる値にあることなど、これら、現宇宙が存在するために極微に微調整されている物理定数は30個を超えるとされるが、それらが果たしてランダムな原子の偶然な揺らぎの連続だけで起こり得たことであろうか。

宇宙に存在する元素のうち水素、ヘリウムなどの軽元素はビッグバンによって生まれたが、生命の誕生に必要な炭素、酸素、窒素などの重元素は、星の内部における核融合と新星爆発の繰り返しにより、宇宙空間へ放出されたものであり、宇宙における生命や人類の誕生に100億年もの準備時間が必要であった理由である。

生命の誕生には、たんぱく質の合成と生命情報をつかさどる遺伝子が欠かせない。その生命活動に必要なたんぱく質は、100個のアミノ酸が秩序だってつながる必要があるが、20種のアミノ酸がL型アミノ酸のみ選んで秩序正しく並び、100個のアミノ酸がすべて目的通りに並んでたんぱく質をつくる確率は、10の160乗の1という、あり得ない程の数字になるが、果たしてこれらが偶然の結果なのか、または生命の誕生を予想し、目的としたビッグバンの時点での、何らか

の目的と計画でできたのか。

それらが宇宙100億年ほどの、銀河や恒星や惑星の形成の過程における、全くランダムな原子の偶然の衝突の連続の結果に生まれたのであろうか。宇宙は偶然に新星爆発によって重元素を生み、その重元素が偶々生命の誕生と進化に不可欠であったがゆえに、生命が生まれる偶然があったのであろうか。それとも、宇宙全体が現にかくあることを、また人類の誕生と進化によって現在ある状態が可能であるために、遙か140億年前のビッグバンの一撃の時点において、あらゆる必要な物理定数に極微の調整を行ったものがあったのだろうか。そこに何らかの計画や意図や目的を詮索したくなるのは当然であろう。

初期の目的達成を、単にランダムな偶然に帰す場合の確率を、ルービックキューブで考えた宇宙物理学者フレッド・ホイール博士の計算では、その完成に、眼の不自由な人の場合1260億年を要するが、操作の過程を確認しつつ行えば、わずか2分で済むという。

このことを思えば、現に我々が見る宇宙の、ビッグバンから銀河、恒星、惑星、そして生命の誕生から人類の進化までの130数億年という時間の、意外の短さに驚かざるを得ず、そこにランダムを超えた「何か」の介在を考えてしまうのである。

アーヴィン・ラズロは、現宇宙がこのように整合性をもつ理由に、宇宙を生み出した母胎のごとき「原宇宙」を想定する。それは先のビッグバンで生まれた宇宙の終焉時にも、現在の宇宙のブラックホールによる崩壊時にも、消滅することなく、むしろすべての記憶と記録を内蔵したまま、次の宇宙に引き継いでゆくものである。この考えに従えば、宇宙の進化の案外の速さにも納得がいくし、また、この宇宙を唯一なものとしなない「多宇宙論」に根拠を与えるものにもなる。

(10)

筆者は上に、宇宙や生命の進化と現存には、限りなく多くの「微調整」が見られることを指摘し、これらの事象も「シンクロニシティ」と呼ぶことを提唱した。「シンクロニシティ」は本来、心理学者・ユングと量子物理学者・パウリによって提唱された、「意味のある偶然の一致」事象を指す心理学的概念であり、この概念を宇宙や生命の進化に関して用いることの不都合を知らないわけではないが、その理由は後に述べる。

因みに「偶然性」の概念は、「必然性」の裏概念と

して哲学が等閑視してきた問題であり、わが国の哲学界においても「偶然性」に関心を示した哲学者は、唯一、九鬼周造先生お一人ぐらいで、その生涯をかけた研究は著書『偶然性の問題』（1935）に纏められた。

しかし九鬼先生の偶然性研究は、典型的な思弁論理の範囲を出でず、偶然性を必然性の三様態に対して「定言的偶然」、「仮説的偶然」、「離接的偶然」に分類し、これを更に緻密に分類していくものであった。偶然性を論じるならば、当然「意味のある偶然性の共時性」も問題になるはずだが、残念ながら九鬼先生の著作の中には、同時代人の「ユング」の名も、「シンクロニシテイ」への言及も一切ない。

九鬼先生は『雑阿含経』の「盲亀浮木」（大海を漂う木片に空いた穴に、その海に棲む盲目の亀が、百年に一度海面に首をもたげ、その木片の穴に首を突っ込むという限りなく小さい偶然の例え）を好んで引用したが、宇宙や万物がかくあることも、人の出会いもすべては、「盲亀浮木」のごとく極微の可能性の出来事であると主張しておられ、それは本稿において筆者が繰り返し述べていることと趣旨に変わりはない。

その九鬼先生が何故ユングの「シンクロニシテイ」に興味を持たれなかったのか不思議であるとともに、21世紀の今、先生がご存命でいられて、最新の宇宙論や進化論、そして量子物理学の知見をもって、偶然性問題の解明に資せられたとしたら、どの様な別の偶然性論を展開されたであろうか、と興味の尽きないところである。

（エピソード4件）

No.1) 1971年の春、オペラ歌手のIさんは、ドイツ・ミュンヘンに音楽留学する。間もなく彼女の母親が私の母に、Iさんがホームシックにかかり落ち込んでいるため、その夏にドイツ旅行の予定のある私に、彼女に会って励ましてほしいとの依頼があった。留学経験のある私は喜んでその役を引き受けた。が、その後連絡の不都合で、肝心のIさんのミュンヘンの住所、電話番号を聞き出せないままのドイツ出発となった。ミュンヘン到着の日は彼女の期待に応えられない気持ちを悔やんでのビールであった。そして翌8月12日、260km離れたバイロイト音楽祭を訪ねる。劇場の駐車場にバスを止めると、その真横に停まったバスの一台から降り立ったロングドレスの日本人女性が「日本の方ですか」と駆け寄ってきた。そして彼女は私に告げたのである。「私はミュンヘ

ンから来ましたIと申します」と！

彼女は私の渡独を母親から聞いていたが、まさかここで会えるとは、と喜び、私は自分の留学体験をもとに「後2か月辛抱されたら、日本に帰るのが嫌になるほどドイツが好きになりますよ」と励まし、オペラの上演後、元気でミュンヘンに帰る彼女を見送った。それから12年間、彼女は欧州各地で活躍する国際的なアルト歌手となり、多くの栄冠を土産に帰国した。

No.2) この同じ旅行での、Iさんとの出会いの10日前にも、私はもう1人の約束の人との出会いを果たしている。前年の10月米国に留学する同僚のK教授と、来年の夏、ヨーロッパのどこかで会えればとの約束であったが、旅程日程表作成の遅れから彼にも連絡はできなかった。にも拘わらず、イタリア到着の初日、私はシシリー島第2の都会のシラクサの、とあるレストランに座っているK教授と見事に邂逅を果たし、約束通りのワイン乾杯を喜んだのである。人口40万人、2千軒を超すレストランの一軒で偶然の邂逅を設定したのは誰であったのか。

No.3) 中国人留学生のS君からの依頼で、東京・新宿のある場所での会合に出席を約束した。しかし、当日急に、東京でのK氏とのもう一つ重要な別の仕事が入り、急遽S君に新宿での会合の欠席を連絡した。K氏から指定された新橋第一ホテルに行くと、彼はその隣の「アネックス」の喫茶室に案内してくれた。暫らく話していて「佐藤先生ではありませんか？」との声に顔を上げると、そこに例のS君が2～3人の友人と一緒に立っていた。きけば、新宿での会合場所が急遽ここ「アネックス」に変更になり、今入ってくる佐藤先生の姿があったので、とのこと。私は私の急な断りをS君がどう受け止めたか、内心心配もあったので、ともかく急用の事実を知ってもらえたことを喜んだが、それにしても大東京の何千もあるホテルの喫茶室で、人はかくも都合よく会えるものであろうか。

No.4) 1994年6月、数日前から気に掛かっていたのは、福州のT総裁の来日までにN氏の新しい住所を、その年の年賀状400枚の中から見付けておくことであった。多忙に紛れていよいよ当日の朝。その面倒くさい作業を考えながらベッドで寝ている私に、台所から妻の声があった。「Nさんの年賀状いつ探し出したの？今、チイちゃん

(孫)が入ってきて、廊下に落ちていたと渡していったけれど……。飛び起きて行ってみると確かにN氏の年賀状! 書斎の高い本棚に積み重ねた400枚の年賀状から、深夜、N氏の1枚を取り出して廊下に置いたのは誰だったのか? 出会いには人と人以外に、人と物との出会いもあることのケースであった。

さて、来訪したT総裁にN氏の新住所を示し、N氏との約束の大阪に行くべく、阪急電車の西宮北口から特急に乗る。出発際に飛び込んできた一人の男性は、そのN氏本人であった。

(筆者のこの種類の体験は、本稿執筆時点で約60数件を数える)

(11)

上記4件の偶然の会合の確率も極めて小さく、単に偶然に起こったとしても、無限に近い時間を必要とするレベルのことである。しかもいずれも明確な目的と意図が実現された偶然であることから、「シンクロニシテイ」に数える。筆者の本稿執筆の動機も、長年にわたり筆者がシャワーのように浴び続けた上の様な体験は、大小合わせて30数件を数え、その生起には伏在する何らかの科学的かつ合理的メカニズムがあるものと考え、模索の末に、いつか量子論の思想へと導かれ、上に述べた「量子論的ネットナビ」や「宇宙を結合させている全体場^{ホロフィールド}」に至った訳である。

シンクロニシテイ発生メカニズムについては、ユングの「集合的無意識」をはじめ多くの論者が説を成しているが、未だ定説に至るほどのものはない。しかし、この様な極めて起こりにくい現象について我々人間は不思議に思い、色々議論をするが、量子論ネットナビの中で生きる他の野生動物や鳥や虫や魚類にとっては、極めて自然なことなのであろう。彼らは常に、その折々に必要な情報を「全体場」との情報交換から得て、最適な行動や対応を選択しているようである。それが本来の「楽園」の姿であったのであろうが、楽園追放の我々に課せられたのは、不毛なるシジフォスの思弁の徒勞である。

さて、エピソード(1)の場合、「会うことの達成」という一点Pにおいて共時性は成り立ったが、元来がIさんとは一面識もない人である。そのプロセスにおける私の行動継起=Aと、Iさんの行動継起=Bは、互いに断絶し、その間に一切の連絡や調整はない。この独立した2つの因果系列が、点Pに至るまでは、極

めて常識的にそれぞれ独自の目的に向けてランダムな進行を続ける中で、我々二人を結ぶ「量子論的ネットナビ」は、秘かに必要な情報を交換し合い、二人の判断や行動をコントロールしていたことになる。

Iさんと私は、それぞれに2~3か月前に、バイロイト音楽祭の8月12日の同じ日の楽劇「パルジファル」の切符を買い、当日2台のバスは、同じミュンヘンを出発してバイロイトまでのアウトバーンを約3時間、途中での昼食や休憩をはさみつつ走る。その間に両者のバスの運転手の行う一つひとつの忠実な職務意識の判断と行動は、機械的な無意味な鎖の連鎖であり、それはジグソーパズルの一片々々が無意味なのと同じである。それはいわば「無意味の連続地点の行程」である。それは、蟬の樹上2週間の命のための、土中数年間の生命にも比されること。誰が意味/無意味の判別者たり得るであろうか。

そしてバイロイトの祝祭劇場の駐車場での停車。偶然の到着時間の一致、偶然の停車位置の一致が重なり、「日本の方ですか?」の問いかけによって、初めて2つの独立した系列が交差した時、すなわち私とIさんとの出会いの「点Pの達成」が成った瞬間。すなわち、「シンクロニシテイ」が生起し、それまでは無意味であった鎖の輪のすべて、パズルの全ピースが、一挙に意味あるものになった瞬間である。

この場合、2つの因果系列のどちらかの鎖の、ただ一個の輪の欠落でもあれば、物語のすべては無に帰する。バイロイト音楽祭の25回あるオペラ演目の、別の日の演目の選択、2台のバスいずれかの到着のずれ、バス運転手の選んだ別の駐車位置など、一個のずれでもあれば「点P」を造らなかつた。しかもこのケースの特徴は、その輪の一片々々に正誤や適否の価値基準が一切関係しないことである。予想外の出来事による遅延が幸運になり、順調が不運となるなど、点Pに待っているのは、一本の細い運命の縄目だけ、正しく「人間万事塞翁馬」の故事の通りである。

ともかく極微の確率で、私たちが会えたのは事実であり、Iさんの母親から頼まれた「激励の役割」の任務が果たせたことは、大きな意味があったことになる。

そのことを偶然に帰することも、また納得できる因果的解明の手立てもなく、さりとて現実に生起したことの無視、無関心も学者としての私の学的好奇心、研究心を抑えることが出来ず、長年に及ぶ思索と模索の末、「量子論的ネットナビ」に格好の解決を見た思いである。

筆者は上に宇宙の創成や現存、また生命の進化、ひ

いては人間生存について、極めて多くの微調整が見られることを指摘し、これを敢えて「シンクロニシティ」と呼んだ。なぜなら宇宙140億年の時間において、それまでの各時点では意味を持たなかった宇宙事象が、宇宙進化の一定経過の中で、いわば一変して意味を持つことの事情に似ているからである。例えば星内部の核融合による重元素の生産と、新星爆発による宇宙への放出と拡散は、それ自体は、純粋に意味のない物理的宇宙事象であるが、それは数十億年を経過して地球上での生命の誕生に炭素や窒素、酸素などの重元素が必須要件であることを知った時点に至って、初めて意味を持った点において、上に述べた「シンクロニシティ」の事情と相通するものがあるからである。

(12)

さて、我々は上に宇宙の存在や人生に意味があるか否かを問い、その答えはない、とした。その真意は、神秘家詩人ジレジュウスの詩に尽きるであろう。元来、宇宙の生成推移にもバラの花の咲き萎みにも、それ自体に意味のある筈はない。勝手に意味を牽強付会するのも、またその無意味に慨嘆するのも人間である。心を悩ます「シンクロニシティ」事象の発生機序を求めて、晦渋な議論を重ねて「量子論的ネットナビ」の論究に汲々とする筆者もまた、バラの花たちの苦笑を買っている一人であろう。

しかし、およそ「意味」や「目的」をいう場合、数式や論理の様に、個人を超えた普遍的で万人共通の意味や目的なるものは存在しない。その点で、宇宙の普遍的な意味、人生の目的を求めて絶望したワインバーグラ科学者たちは、その設問自体が間違っていたと言える。すなわち、彼らは、科学が現時点で得た知識や実験結果が、恰もすべてのことに解答を見出していること、そして現時点での科学的手法で解答の見出せないことは、すなわち意味のないこと、という前提でしか議論を進めていないのではないか。

意味や目的は、すべて個人一人ひとりが主体的に、自らの人生体験の中で培われた価値観や関心事、信仰、信条との関わり中から見出すべきことであり、そのような意味や目的が、宇宙観測のデータや微分方程式の中に見出せるものではない。加えて人生の現時点は常に、いわばジグゾーパズルの完成への途中の過程であり、そのパズル作成の一片々々は、その折々に慎ましく自己の役割を果たしているだけであるが、その一片々々のすべてが図柄完成にとって必要不可欠なものであり、

またその占めるべき地位、価値、重要度にも、軽重や上下は一切ない。

宇宙の創成が137億年前のビッグバンによることを人間が知ったのは、20世紀後半のごく最近のこと。上に述べた「宇宙と素粒子の舞台は今、幕が上がったばかり」であり、シンクロニシティ事象でいえば、全過程内の事柄がまだ「点Pへの途中経過」にあり、「意味」の開花以前にある状態、すなわち、連続する「無意味の地点」を進んでいる状態なのである。そのことを思えば、近代科学が生まれてわずか300数十年。140億年近い宇宙や生命の進化について、その性急な結論を下す焦燥を戒めて、巨大ジグゾーパズルを、相応の時間をかけてゆっくりと完成させてゆく度量と寛容が必要であろう。

ジグゾーパズルについては筆者には忘れ難い思い出がある。それは1975年春、当時最高の豪華客船であった「QE2」の初の世界一周クルーズに、横浜からホノルルまでの1週間乗船した時のこと。世界一周3か月の船旅の無聊を慰めるよすがに、ラウンジには3000ピースのジグソーパズルが置かれ、興味ある乗客は誰もが自由に参加して挑戦できた。船は母港サザンプトンを出てすでに1か月を経っていたが、パズルの完成度は三分の一程度もなく、筆者のような途中下船者は、その絵図の完成を眼にすることなく、船を去ることになる。

さて、「宇宙進化クルーズ」は開始から137億年を経て、銀河、恒星、惑星超新星爆発から太陽系の形成、そして地球と地球上での生命の誕生と進化、さらに人類と文明の発展等々、いわば1個の超巨大パズルが作られていく過程に擬せられよう。我々には、そのクルーズの航路や最終目的地、パズルの最終完成の絵図は示されていないが、その進化の航海を見る限り、全くランダムな逆走や旋回や停止・発進を繰り返すのではなく、何らか一定の秩序と法則に従った航海であるように思われるのである。パズルは完成に向けて着実に進んでいるようではあるが、人類の寿命は、その完成を眼にすることを許さない。

QE2クルーズに短期乗船し、2～3片のパズル作りに協力できた筆者は、完成時のシャンパン乾杯には与^{あず}かれなかったが大満足で下船した。それよりも感銘を深くしたのは、熱心なQE2の乗客たちが、忍耐強く、寛容で、誇らず、およそこと信じ、忍び、望みを抱く、文字通り『コリント前書』の説く「愛」の人々であったことである。この様な人々こそが、「宇宙進化クルーズ」のジグソーパズル作りに参加を許される

人々である。まかり間違っても短気に、目に見えないクルーズ航路や最終目的地に腹を立てて、作成途中のパズルをひっくり返したり、無意味を叫ぶ人々ではないであろう。

その宇宙パズルにはもちろん完成後の絵図はないし、ピースの形状も見えず、触れられず、まともに人間の対応できる代物ではない。にも拘らず、古来これに挑戦しようとしたのが、預言者、宗教家、哲学者、科学者、詩人たちの名だたる人々であった。しかし、このジグソーパズルの持つ本当の意味は、その絵図の完成にあるのではない。端的に言うならば、それは宇宙の原理が「愛」であることの会得であり悟りである。人の世の常である、国や組織や版図の大小、貧富、権力の強弱を問わず、ただ利他と無私の心のあるところに、必ずや、当事者本人に宇宙が秘める意味の一端^{かいま}垣間見させ、生きること、在ることの感謝と希望と勇気を教えるはずである。

(13)

この「宇宙の原理が『愛』である」という筆者の考えには、当然多くの批判が向けられるであろうことに對して、筆者は敢えて反論はしない。超高温、超高密度のプラズマ物質の大爆発のビッグバンに始まり、銀河、恒星、惑星を生み、核融合と新星爆発、そしてブラックホールによる終末まで、宇宙進化のプロセスはすべて純粋な物理法則に準拠したものであり、その宇宙には、愛という「価値」に関わる要素の介入する余地は一切なく、まして「愛に司^{つかさど}られている」などの考えは、到底受け入れがたいところであろう。

しかし、想像を絶した大爆発と轟音の連続である修羅場の宇宙ではありつつ、現に我々の見る夜空は限りなく静寂で美しく、星は優しく煌めいて人々の心を癒してくれる。また超高温で有害な放射線や太陽風を放つ太陽も、地球上のあらゆる生命持続には不可欠であり、朝焼け、夕焼け、時には美しい虹空や神秘的なオーロラを現出して、見る人々の心を癒し励まし、その恩恵は限りなく、古来多くの民族が太陽を「神」として崇めた理由である。

宇宙は一瞬として裸身の身を置くことのできない無慈悲で冷酷なる空間ではあるが、その宇宙にあって、我々人類の住む地球の生活空間は、まさに奇跡のように静穏で美しく平和である。オゾン層、大気層による環境の保護、四季の変化、陸、海、空に広がる動植物と豊かな生命の繁茂等々。この様な友好的な「微調整

が何故になされたのか知る由はないが、それを恩恵と受け止める筆者は、これをこそ「愛」と呼ぶのである。

さて、バートランド・ラッセルやスティーブン・ワインバーグらニヒリズムを主張する人々が、この恩恵を感謝できないとすれば、誠に不幸なことである。ただ彼らの論議の核心は、要は、我々人類がいかに愛や信条や希望を讃え、壮大なる文明社会を築こうとも、それは永遠に存続することは不可能で、やがては太陽系の終焉とともに消滅する運命にある、との理由に尽きると理解する。

確かに太陽は50億年後の熱死によって、太陽系のすべての星々とともに消滅すると言われるが、その時、すでにわれわれ人類自身が存在しない地球上で、その杞憂を抱く^{あるじ}主は誰なのであろうか。仮想の不安と杞憂に恐れを抱く理由は存在しないし、また永遠に存続しなければ、生きること、生きたこと自体の意味がないというのであれば、それは不当なる要求でないであろうか。太陽や、銀河でさえ百億年から数十億年の命を終えて消滅するし、蟬は10年余の地中生命を経て羽化後、わずか10数日で命を終える。しかし、その鳴き声は歓喜に満ちてこそあれ、決して恨み節ではない。それに較べて数十年もの長い寿命を与えられつつ、さらになお不死を願う人間こそ、宇宙における不当なる例外者と言えよう。

「神に愛されたものは早逝する」という古代ギリシャの諺に従えば、蟬は余程に神に愛された存在だったのか。ルーブル美術館の古代ギリシャの部屋の一角に、「クレオビス・ピトン兄弟の彫像」が立つ。これはかつて、オリンピアの競技を老母に見せたいと、遙か地方から日夜を分かたず荷車を押してオリンピアに到着した兄弟が、その孝養の美德の「最高の報酬」として、即なる「死」によって^{よみ}嘉せられたことを記念したものであるという。

人間の幸福を問うて、「生まれたならば、なるべく早く死ぬこと。それ以上の幸せは、生まれてすぐに死ぬこと。いや、人間の最高の幸せは、生まれてこなかったこと」。この様におよそ不老不死とは正反対の思想を持った、古代ギリシャ人の死生観であった。

しかし、我々は寿命の長短に価値の軽重を置くべきでないことを、学んだ。生起する事象の意味に大小のないこと、いかに微小なことであれ、全体の完結のために不可欠な役割を有することを、「シンクロニシティ」事象や「ジグソーパズル」において学びました。

その観点からすれば、生と死、生起と消滅、始原と終末に関しても例外ではないであろう。

ただ、単なるゲームに過ぎない「ジグソーパズル」や、個人的な出来事の「シンクロニシテイ」事象を、宇宙に関する科学的法則に結びつけて考えることの不当性を指摘されれば、筆者はそれ以上の議論を断念するほかはない。なぜならば、これに関しては、科学法則や原理のごとき、共有できる普遍妥当的なツールは存在せず、個人々々の体験と会得に依存するほかに道はないからである。

しかし、幸いにも現代最新の量子物理学の知見は、必ずしも「シンクロニシテイ」事象の機序解明に冷淡ではなく、全体場や量子論ネットナビの提供で、その合理的解明に光を射してくれている。そしてそれにより期待を持てることは、宇宙が今まで考えられたように、完全に無機的な「物理色」の世界ではなく、多分に個人の心や願い、祈りを受容し、それに応えようとする「こころ色」の世界でもあるということである。

前述の全体場や量子論的ネットにしても、その網の本質を成すものは波動であり、その動きは精妙であって、肉眼に見えるものではない。唯、その何本かの糸が撚りあい、結び合った結び目の動きだけが見え、それが他の結び目の動きにつられて連動することを初めて、人はその背後に広がる偉大なネットの存在を知ることになる。「シンクロニシテイ」はその様な、微小なる結び目の一つとして、ネットの存在に気付かせる網の一目に過ぎないのかもしれない。しかし、それは岩の裂け目にきらりと光った一瞬の輝きであるが、それに気付く者にはその奥に隠された金の大鉱脈の埋没を知らせる信号であるのか。

いやそれよりも、固い鉄の因果律の鎖を、一瞬にしてバラの連花に変えた魔術師が見せたウインクの様ではなかったか。

(14)

2012年7月、欧州合同原子核研究機関（CERN）の「ヒッグス粒子発見」のニュースは世界の物理学界に大きな歓声をもたらした。それは素粒子世界の「標準理論」で予測されていた、「質量の源」と考えられるものだからである。元来物理学は、万物を支配する4つの力、すなわち、重力と電磁力と原子内の強い核力と弱い核力、この4つの力に関する学問であるが、その為には、力の元になる「質量」の存在が不可欠であ

る。

万物はビッグバンによって生成された素粒子を組成としているが、そのビッグバンによる創成当初には、いわば“霞のような状態”であった素粒子に、計測可能な「質量」を与えたものは何か、残る大きな問題であった。それが明らかでなければ、素粒子の質量化はなく、質量がなければまた「力の学」、すなわち力学の成立はあり得ないからである。その為、素粒子に質量を与えたものとして「ヒッグス量子」が究極の素粒子として要請され、一部の識者によって「神の素粒子」とさえ称せられるほどになったものである。しかし、その考えの大前提には、宇宙が究極的に物理学的な存在、すなわち質量的で力学的存在であることに尽きる、という断定的思料がある。

それに対して、我々が見てきた宇宙は、必ずしも冷たく命も心もない物理学一色ではなく、生命色、さらに豊かな「こころ色」にも彩られたものであることを知った。素粒子に質量を与えたヒッグス粒子は重要ではあるが、それと同時に、筆者にとっての究極的関心事は、宇宙に初めて「情報」ないしは「こころ」を与えたものは何か、ということである。

物理学が、宇宙を満たす膨大な質量とエネルギーを、4つの力に纏めた「力学」として扱う学問であることは理解するとして、その場合「情報」はどこに位置するのであろうか

たとえば総噸数25万トン、出力が10万馬力のエンジンを搭載した巨大船舶を動かすためには、燃料や膨大な数の機器類、それを管理し駆動させる要員などが不可欠であることは自明である。しかし、要目通りすべての資材、機材、要員が整ったとしてもそれでこの巨大船舶が動くものではない。それを動かす「唯一つのもの」がなければならない。それは「情報」である。この場合は、キャプテンの「微速前進」の一言である。それは、眩くような小さい声でよい。その小さな一言によってこそ、船の巨体は動き出すのであり、逆に、その一言がなければ、船は絶対に動き出すことはない。宇宙も船もそしてビッグバンも、ただ原子の偶然の揺らぎだけでは、秩序ある運動や進化はもちろん、始動すらない。

ヒッグス粒子が、漠とした霞のような素粒子に質量を与えることは重要な要素ではある。しかし、それによって与えられた質量は、アリストテレスが言う、dynamis（潜勢態）としての質量に過ぎない。アリストテレスによれば、単なる可能性としての素材である

質量に、idea（形相）が伴わなければ *energeia* 「現勢態」にはならない。すなわち、その霞のような漠たる素材に「形を与える (in-form)」ものが、idea 「形相」であり、それが「情報」(information)なのである。その意味では、初めに情報ありき、とも言えるのである。

しかし、それで議論が尽きたわけではない。情報としての「微速前進」の不可欠重要なことは理解できるとしても、それがキャプテンの発声で「情報」になる前に、まず彼の「心」において用意されなければならない。我々は上に、量子論的ネットナビを、「全宇宙を結び付けている全体場^{ホロフィールド}」と呼び、これがあらゆる情報を潜勢態として内蔵するものと述べたが、その情報も「心」なくしては起動しないということである。

しかし今日の宇宙論は、上記船舶の様な「情報」や「心」を排除して、宇宙の始動や進化過程における数々の「微調整」を、すべてを単なる「無秩序な揺らぎの連続^{ランダム}」に帰結させる以外の論を認めない。その確率たるや「廃車置場を襲ったハリケーンが残した1台の完成車」の可能性を、科学者が認めるに等しきことと思われるが、それをこそ非科学的とは言えないだろうか。

(15)

筆者は上に、宇宙や銀河でさえ有限である中で、科学者が永遠存続が認められない人間存在を、不条理や無意味やニヒリズムと主張することを「不当なる要求」と批判した。その理由はかかる要求が、宇宙に存在する銀河から蟬に至るまでの、あらゆる存在者の中で唯一、人間に限られた要求であるからである。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、仏教など伝統的宗教をはじめすべての宗教が、一様に「靈魂の不滅」を前提に教義を建てて、その背景にあるのも飽くなき「永遠希求」という見返りの請求である。

また哲学者カントは、不死を「最高善の要請」の哲学問題として証明しようとした。すなわち人間は、善行の「報酬」として幸福を享ける権利を有し、「福・徳一致という最高善」の理想実現が要請される。ただし、現世においては、必ずしもその理想実現の保証はないが故に、必然的に「來世」と「靈魂不死」が要請され、さらにその「主管者たる神」が要請されることとなるのである。

この事情を顧みて判る他の存在者との根本的相違は、一貫した人間の飽くなき「対価と報酬請求」の欲望に

ある。「愛」を無私、無償と呼ぶならば、その欲望はまさしくその対極にあるものである。人間が宇宙において、「永遠の生命」を求めるに値する、如何ほどの功績、善行を為したのか思いつく節はないが、その報酬の不死の欲望だけは、あらゆる欲望のなかで最大にして傲慢なる欲望である。他の動植物には見られない「死への恐怖」という人間特有の心理は、その様な人間自らが創りだした「不死への貪欲」が生み出したものであろう。その様な人間に離れないのは抜き難い「死への不安」であっても、決して「甘き死よ、來たれ」(バッハ・カンタータ)の安らぎの歌声ではないだろう。

昼間を熱心に汗を流して働いた人に、眠りは何ものにも勝る慰藉であり喜びであるように、人生を悔いなく生きた人にとり、死は歓迎すべき「甘き死」であり、決して忌むべきものでない筈である。人間は無より出でて、無に帰る。人生を幸福に過ごした人も、不幸に嘆いて過ごした人にも、死なる故郷は平等に優しく迎えてくれるはずである。

一方、それでもなお貪欲に不死と永生を求める人は、その命を得て何をしようとするのだろうか。現世で果しえなかつた夢の実現を願うのか。まかり間違っても、そこでまた「生老病死」の不安に慄く人生を送ることにならなければいいのであるが……。

(16)

上に述べた人間の「永遠の生命」への希求、「不死への貪欲」も、宇宙の終焉を超えて有効であるはずはなく、その意味ではかかる議論自体が無意味であると言える。そこで改めて問題になるのは、単なる生物学的な「死」が、個人の魂の死を意味するか否かである。一般的に我々は、心肺停止、脳波の平坦など人間の医学的所見による肉体的機能の停止をもって「死」と考える。そして死は不可逆的で生命の再生、復活はあり得ない、とされた。

一方、古今東西を問わず、死者の靈の死後存続の信仰は根深く、幽霊体験、心霊体験、生まれ変わりなど膨大な事例の報告がある。それは単に市井の庶民に限らず、宗教家、哲学者、科学者を含めて広範囲に及び、これを単なる幻覚、幻視、錯覚などの脳内現象として解釈するには留まらない実証性を持つことも事実である。

プラトンは靈魂不滅を持論とし、その対話篇『国家編』においては、戦死した戦士「エル」に、火葬の直

前に甦り、あの世で見聞きしたことを詳細に語らしめた。エジプトやチベットの『死者の書』、ダンテの『神曲』や、スウェーデンボルグの『霊界通信』など、フィクションを超えた真摯な証言は枚挙に暇がない。科学の国・英国においても1882年には、ケンブリッジ大学の科学者たちにより「心霊科学協会」が設立され、錚々たる科学者が会長を務めたが、ベルクソンもその一人であった。彼は快樂と奢侈に溺れる現代文明の危機に警鐘を鳴らすとともに、その風潮が、彼岸への信仰、すなわち魂の永生の自覚の欠如に由来するものとして、その覚醒のために「心霊科学」の研究の必須なることを力説したが、唯物科学いたま なる1930年代当時に、この警告と提言が世に受け入れられる道理はなかった。

その後、心と意識の問題は、脳科学者の研究テーマとなり、大脳皮質の電気生理学的な機序が、微小電極、MRI、PET 等最新の検査器具を用いて明らかになっていく。それによって人間の心の本質も、死後生や転生などの心霊現象が、科学的、合理的な光のもとで一挙に明らかにされると期待されたが、事態は思わぬ方向に進むことになる。

医学の進歩は、蘇生術にも大きな変化を及ぼし、心肺停止、脳波の平坦化でもって、本来は「死者」とされた人間が蘇生して、その「臨死体験」や「死後生」や「幽体離脱」の体験を語り出し、その共通性など説得力を持つものが多く専門学者の興味を惹くことになる。(この場合、蘇生した以上は完全な「真の死」の体験ではなく、あくまで「仮の死」に過ぎない、との異論もあるが、「医学的な死」を基準にしての議論である)

また同様にキュプラー・ロスやレイモンド・ムーデイやらの医師や心理学者、臨終時の幻像(デスベッド・ヴィジョン)の報告者デイヴィッド・ケスラー、さらに「生まれ変わり」と認められる証言を検証して、綿

密な学術レポートに纏めたスティーブソン教授らの著作が、1970年代頃から続々と世に出ることによって、これらの現象をすべて「脳内現象」と捉えてきた科学的・合理的解釈に対して、新たな視野が開かれはじめた。

従来は病院の終末ケアなどに勤務する臨床医が多く体験しつつも、その立場上、発言を控えていた医師たちの積極的証言も、最近よく聞かれるところである。

この様に、古来多くの宗教者や預言者や哲学者が説いた死後の魂の存続や生まれ変わりが、「迷信」や「脳内現象」の解釈を脱して、科学的検証をもって吟味され始め、古い「降霊会」ならぬ、各種電子機器を介した科学的な「死者との交信」の公開実験が行われ、その実況が欧州各地で聴取される時代となった。死の彼方は必ずしも無ではないようである。

この様に、心や意識が脳を超えて存続し、脳内現象から独立した働きをするものとなれば、それによって、幽体離脱、テレパシー、遠隔治療、死者との交流、さらにはシンクロニシティ現象の解明にも、大きな道が開かれることになる。臨死体験を経た人の多くに見られる特徴が、愛への目覚め、他者や環境への思いやり、物的欲望に変わる知的要求の増大などの精神的変容であるが、その成果は、ひとり個人の価値観、人生観の変化に止まらない。近代以降の唯物科学が招いた物質主義とニヒリズム思想による、歯止めなき物的、金銭的欲望の人類文明に示された最良の教化・教導となり、これこそがベルクソンが「心霊科学」研究の必要を説いた本意であった。

物質科学の厳しい精査実証により、明確に「迷妄」か「脳内現象」と切り捨てられて当然な、これら“いにしへの諸問題”が、白昼の文明社会に改めて「市民権」を主張している様を、我々はどう見るべきであろうか。